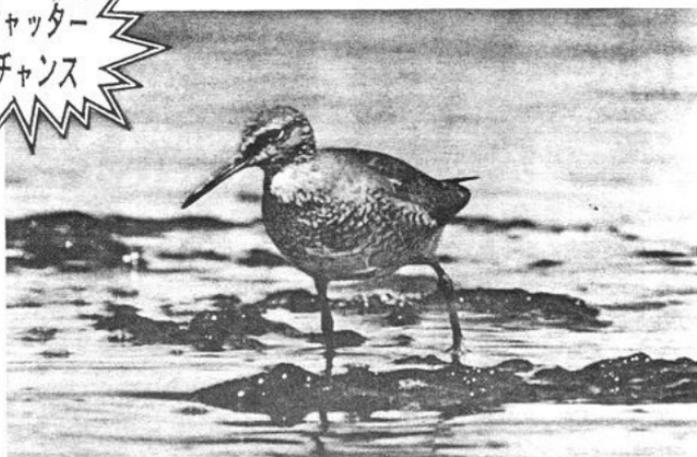


市川自然博物館

10・11月号 （通巻第8号） だより



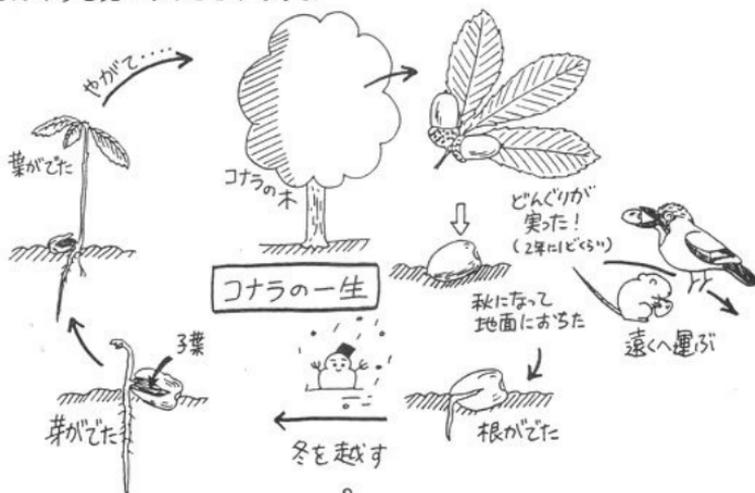
～キアシシギ～

シギの間には、長い渡りをするものがたくさんいます。一年の間に、子育ての地（シベリアやアラスカなど北半球北部）と冬越しの地（熱帯地方や南半球）を、往復するのです。日本には、この長い渡りの途中、春と秋の一時期だけ休息に立ち寄ります。まだ暑い8月中ごろ、江戸川放水路にはキアシシギがたくさん来ていました。キアシシギは、黄色い脚を除けばそれほど目を引く鳥ではありません。しかし、ピューイ、ピューイと鳴き交わす張りのある声は印象的で、干潟に秋の訪れを告げます。シギの仲間が旅立ち、いれかわりにカモの仲間が北から戻ってくると干潟は冬を迎えます。

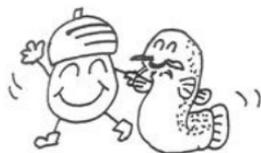
特集 どんぐり

1. どんぐりの正体

- どんぐりは木のたねです。どんな木もたねをつくり、たねの形は木の種類によって異なります。カシやナラ、クヌギの木がつくるたねが、どんぐりなのです。
- どんぐりはたねなので、将来カシやナラ、クヌギの木に成長する可能性を秘めています。秋、じゅうぶんに熟して落ちたどんぐりのうち、湿り気や温度などの条件に恵まれたものは、根を伸ばします。どんぐりは、秋のうちは、根だけを伸ばすのです。どんぐりの中にある養分を使って、できるだけ長く伸ばします。どんぐりひろいをしていると、根を伸ばしたどんぐりを見つけることがあります。
- 冬を越したどんぐりは、春、貯えた栄養を使って、茎を伸ばし、本葉をつけます。ここまでくれば、ひと安心です。秋に実るたくさんのどんぐりのうち、ぶじに根を伸ばせるのはごく一部で、冬を越し、茎を伸ばし、本葉を広げられるのはそのまたごく一部なのです。
- 林の中の、どんぐりがなる木の下には、こうして育ったこどもの木が、たくさん生えています。そのうち、良い条件に恵まれたわずかなものだけが、大きく育つことができます。



ココロ



2. 動物とどんぐり

●どんぐりから動物へ

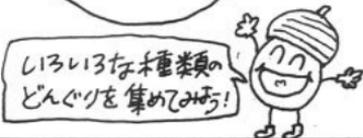
どんぐりには、根や葉を伸ばすための栄養がたっぷり含まれているので、動物にとって、ごちそうです。いろいろな動物が、どんぐりを食べて生活しています。市川の場合だと、野ねずみのアカネズミと鳥のカケスがどんぐりを食べる動物の代表です。

●動物からどんぐりへ

アカネズミやカケスには、どんぐりを一時的に隠しておく習性があります。落葉の中などに隠され食べ忘れられたどんぐりのうち、条件に恵まれたものは発根、発芽することができます。アカネズミやカケスは、どんぐりを離れた場所に運んで隠すので、カシやナラの木が分布を拡げるのを助けていることになります。

3. どんぐりの種類

●市川で見られるどんぐり

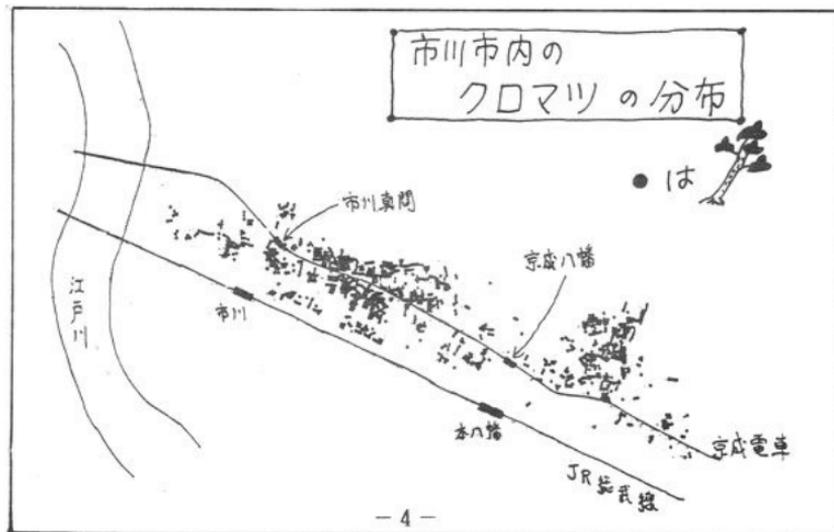


市川・自然探検

～市街地のクロマツ～

京成電車の線路沿いにある一群のクロマツは、市川市を代表する景観として古くから親しまれています。これらのクロマツの由来ははっきりしませんが、一説には、かつてこの一帯で果樹栽培が行われていたころの、畑の境界木の名残とされています。樹齢 100 年前後と推定されるものが多く、独特な景観を作り出していますが、近年は、クロマツよりも高い建物も多くなってしまいました。

クロマツは、市川から鬼越にかけての範囲に生えています。分布範囲が不自然な形をしています。これは『市川砂州』という古い地形と一致しています。かつては市川砂州の上と北部の台地以外は深い湿地だったので、人々は小高い市川砂州の上で生活し、クロマツもここに植えられました。

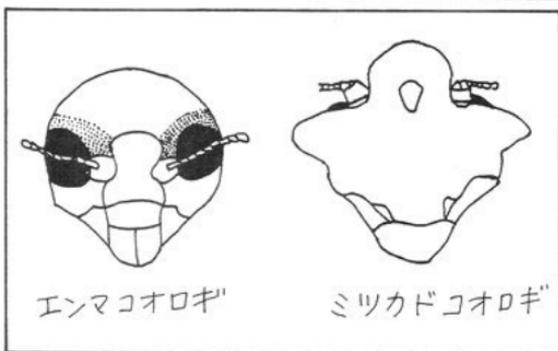


市川の こん虫



コオロギ

9月になると、市内ではセミの鳴く声にかわって秋の鳴く虫の声がよく聞かれるようになります。とくに、コオロギの仲間の声は市内でも普通に聞かれます。なかでも「コロコロリー」と鳴くエンマコオロギは体が一番大きく、庭の片隅や市街地の公園の草むらなど、



市内のどこにでもいる、一番普通なコオロギです。このエンマコオロギという名前は、顔を正面から見ると、ちょうど地獄にいる閻魔大王（えんまだいおう）によく似ていることからつけられました。このほか、市内でよく見られるコオロギとしては、顔が「おかめひょっとこ」のおかめに似ているオカメコオロギ、顔に3つの出っ張った部分のあるミツカドコオロギ、鳴き声が「リッリッリッ」と聞こえるツツレサセコオロギがいます。

むかしの市川 ～その6～

ニオイタデのこと

博物館指導員 大野景德 記

昭和23年（1948年）の夏のことでした。桐乱（植物採集ケース）を肩に国府台のじゅんさい池のほりを歩いてたところ、酢酸アミルのようなにおいがただよっているのに気づきました。どうも植物から出ているようで、あたりを調べてみると、ある大型のタデから発生していました。茎や葉に毛が密生し、その毛からかなり強い香気をもつ粘液が出ているのです。今までに見たこともないタデに驚いて調べてみると、ニオイタデとわかりました。しかも千葉県ではここだけにしかなく、

日本全土でもきわめて珍しいこともわかりました。

奥山春季著『原色日本植物図譜』にのっているニオイタデの写真はじゅんさい池で採集されたものです。その後、じゅんさい池の改修のため、幼苗を大町自然公園に移植しました。大町公園では、今年も紅色の美しい花を咲かせています。



大	
町	歳
	時
	記

自然観察園に、セイトカアワダチソウの黄色い花が目立つ季節になりました。夏の間は青々としたヨシに覆われていて気づきませんでした。こんなにも生えていたのかと驚かされます。もともと湿り気の多い土地が好きで、乾燥化の始まった湿地にすぐさま侵入し、あっというまにあたりを覆ってしまいます。園内も、この”黄色”の分布で、どこが乾燥しているかが一目でわかります。この黄色い花が実を結び、数万個の綿毛で『泡立つ』頃になると、いよいよ冬がやってきます。カケスやシロ

ハラ、ジョウビタキなどの冬の訪問者達のなつかしい姿が、観察園のあちこちで見られるようになります。そして、それまで湿地の主役であったトンボや、園内を賑わしていた鳴く虫たちは、そのころには姿を消していることでしょう。



行徳野鳥観察舎

だより

アオマツムシ

リーッ、リーッリーリーリーリーリーリー
アオマツムシが鳴いている。今年は特に多いようで、とうとう観察舎の庭にまで入ってきた。夜になると公園や街路樹など、いたるところで聞かれる。木の上で夜さかんに鳴く虫がいたら、これと思ってよい。埋立地先端近くの塩浜の工場でも声を聞いた。桜、楓、桃の木などが好きなようだが、市川全体に広がっているのだろうか。

明治時代に東南アジアから入った帰化昆虫で、スズムシより高い調子で単調に鳴き続けるため、他の虫の声音が聞き取りにくくなってしまふほど。あまりにぎやかなので試しに数えてみたら、何と148声も鳴き続けてからやっとひと休み。数える方がくたびれた。



文と絵・蓮尾純子

展示室より

市川の大地

展示室には、市川の台地の地層を示す写真があります。これを見ると、この台地がどのようにしてできてきたか想像することができます。いろいろな研究から、下部に見られる成田層は、海底に積もった砂であることがわかっています。また、上部の関東ローム層は、細かい軽石や火山灰を含み、富士や箱根などの火山の噴出物であることがわかっています。中間の市川砂層は、砂粒が粗いことや、成田層をけずるようにしてたまっていることから考えて、成田層が海底から陸に変わっていく途中で、川の流水や海の波の働きを受けながら堆積したものと考えられます。市川の台地は、このように海底でできた砂層が陸地にかわり、そこに火山灰が降り積もってきたと想像されるのです。



関東ローム
(立川ローム)
関東ローム
(武蔵野ローム)
関東ローム
(下末吉ローム)
市川砂層
成田層



草木で遊ぼう

どんぐりごま

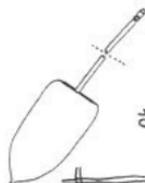
①かたちのいいどんぐりをさがす。

④ようじを適当な長さに切って…



②どんぐりに穴をあける。

③接着剤をつけたつまようじを穴にさす。



できあがり!

さあ、まわしてみよう!



